アリオストの『オルランド・フュリオーソ』における歴史的事件への暗示

高岡　幸一

『オルランド』XXVI, 30-53はMerlinの泉水彫刻の浮彫の描写である。アレゴリックな怪物描写で始まるこの浮彫の内容やその歴史的な暗示について以下に考察してみよう。先ずは、この泉水彫刻の場面へと至る状況を眺めよう。

１．登場人物が泉水彫刻を見出すまで (XXVI, 1-30)

ガスコーニュのある荒野において二つの群衆が合流する。一方ではスペイン側から悪党Ferrauの強欲な母親Lanfusaが、人質のChiaramonte (Clairmont) 家の二人の若者MalagigiとViavianoを楯に、Bayonneの悪党Maganza (Meyence) 家のBertolagiとの間で、報償金や高価な品々と引き替えに取引しようとやって来る。他方からはBertolagiが宿敵Chiaramonte家の若者二人を捕虜として手に入れるため財宝を車に積んで約束の取引の場に向かう。この悪党同士の人質交換の場に、人質救出のため駆けつけたChiaramonte家の二人RicciardettoとAldigiero、これに助太刀を買って出たRuggieroと突如この場を通過する際正義の仲間に加わる遠来の旅の騎士（女剣士)、Marfisa（実は彼女はRuggieroの妹であるとずっと後に判明する）の四人の強者たちが攻撃を仕掛けるところからXXVIは始まる。

RicciardettoとAldigieroはBertolagiを見つけるなりこれに攻撃を仕掛け、殺し、これを合図にRuggieroとMarfisaも行動を開始し、二人の騎士はどちらも見事な槍さばきを披露する。急襲を受けたモール勢とMaganza家の一群は互いに相手が裏切り、取引が決裂したと勘違いし、混乱し、潰走する。瞬く間に両軍を打ち破り、人質を奪回した四人の騎士は兜を脱ぎ、Marfisaが女性と分かり、皆は驚く。家来たちは積み荷を解き、食事を調える間、お互いの腕前に感心したRuggieroとMarfisaは特に親しく会話を弾ませる。やがて近くの木陰に泉水を見つけ、勝利者はここで凱旋を祝うが、この泉水こそかつて預言者 Merlin がフランスの地に造った四つの泉水のうちの一つで、大理石で精巧な浮彫が施され、声さえ出ればまるで生きた像と思えるほどだった (direste che spiravano e, se prive / non fossero di voce, ch'eran vive.) (XXVI, 30)[1)]。

２．泉水彫刻の描写 (XXVI, 31-36)

先ずはそこに表出された浮彫の図柄が説明される (XXVI, 31-36)。「そこでは一匹

１）テキストはRicciardi版を用い、日本語訳は著者訳による。

の獣が森から現れる姿が/見える、残忍で、憎々しく、狂暴な顔つき/をし、耳は驢馬の耳をし、頭と歯は、/狐のそれで、飢えに乾ききっており、/爪は獅子の爪をし、残りの他の部分は/すべて狼のそれであり、...」(Quivi una bestia uscir de la foresta / parea, di crudel vista, odiosa e brutta, / ch'avea l'orecchie d'asino, e la testa / di lupo e i denti, e per gran fame asciutta : / branche avea di leon ; l'altro che resta, / tutto era volpe ; ...) (XXVI, 31) とここまでは単なる「怪物描写」である。ところがこの後この恐ろしい怪物を四人の人物が槍や、剣や、矢で殺している光景が説明される。

少し後に判明することではあるが、どうもこの怪物は「貪欲」のアレゴリーであるらしい。「貪欲」という名の怪物が遂に四人の勇者によって誅される図柄とは、ここで人質を金品財宝で売買しようとする悪党たちを四人の騎士が征伐した勝利の記念として、この戦いの後の宴席を飾るいわばtrophéeとしてふさわしいものかも知れない。ところが、Merlinの泉水の浮彫はさらに多くのことを語っている。

怪物が蹂躙している土地は、フランス、イタリア、スペイン、イギリスの全土、ヨーロッパとさらにアジアにまで及び、怪物が襲うのは、平民から高位の者まで各階層に至り、特に王侯貴族にいっそうの牙を向ける。つまり、社会的身分の高い者ほど貪欲に耽りやすい。最悪の被害はローマの都で、枢機卿や法王も狙われ、聖ペトロが汚辱され、信仰が危機に瀕する。この恐るべき獣の前には、城壁も城塞も敵でなく、神の僕にまで魔手が延びるかと思えば、愚衆からは崇められ、天国と暗闇とのいずれの扉の鍵も握ると、獣が豪語するが如し。

この獣に対し果然と立ち向かうのは、頭上に勝利の月桂樹を戴いた一人の騎士、脇に同じ黄金の百合の紋章をもつ三人の若者もいる。各自が頭部や衣装の裾に刻まれた名を持っている。獣の腹に柄まで剣を突き刺すこの騎士にはフランス国王Frankois Ier と明記され、オーストリアのMaximilienもおり、孫の神聖ローマ帝国皇帝 Carlo V (Charles-Quint) [2] は獣の喉を槍で一突きする。胸を射抜くのはイギリス国王Henry VIIIと記されている。フランス国王の近くには同じ百合の花の紋章をつけ、背には十世と刻した一匹のライオンが獣の耳に歯を向けている[3]。

３．Malagigi による泉水彫刻の解説（その１）(XXVI, 37-47)

『オルランド』の登場人物たちがこのような図柄を眺めても、石に刻まれた名を見ても何も理解できない。好奇心に駆られた騎士たちやMarfisaが誰かこの謎を解く者はいないかと云うと、救出された人質のViviano が降神術を心得た弟、Malagigiに目配せし、Malagigiは話し出す。

「ここに名の刻まれた連中はまだ生存しておらず、七百年後の未来の世に栄光に包まれて生まれる者たちで、ブリタニアの魔術師MerlinがArthur王の時代にこの世に起こるべき事件を素晴らしい技巧で彫刻家に描かせたものだ。「貪欲」のア

2）『オルランド』初版 (1516) (40歌) 時にはCharles-Quintは単にCarlo di Borgonaであって、帝位に就くのは1519年である。

3）Medici家出身の教皇Leo Xのこと。ウフィッチ美術館蔵のRaffaelloの肖像で有名なこの教皇が、名前の連想から、獅子の姿で現れるのは興味ある。なお、フランス王家の紋章は黄金の百合で、Medici家のそれは赤百合。

レゴリーであるこの怪獣は、黄金時代の後、人間が畑に境界線を引き、耕す土地を分配し、所有の概念が生まれると共に、冥界からこの地上に現れた。初めの頃はまだ全世界に徘徊しておらず、多くの国は手つかずに放っておいたが、時代と共に成長を重ね、またこれからも成長を続け、巨大な怪獣となり、残虐の限りを尽くすであろう。」

「この怪獣に最初に一撃を加えることとなるのは Franｃois Ier であり、この王の『恵まれた治世も最初の頃はまだ王冠も彼の頭にしっくりとせず』(L'anno primier del fortunato regno, / non ferma ancor ben la corona in fronte,) (XXVI, 44)、アルプスを越えてフランス軍に反抗するスイスの暴動勢力の鎮圧に兵を向けるが失敗し、再度の遠征では百合の花をはためかしロンバルディアを南下し、スイスを粉砕し、教会軍、スペイン軍、フィレンツェ軍を破り、難攻不落のMilanoを開城させる。」

この辺りに来れば、図柄の解説というより、Malagigiの口を借りての16世紀初頭のヨーロッパの政治情勢の説明であり、Ariostoの同時代の読者にとっては周知の事実である。ここではNovaraの戦い (1513)、Marignanの勝利 (1515) の史実が暗示されている[4)]。Milano攻防に関して見せたFranｃois Ier (1494-1547)の勇気は「偉大なカエサルの魂」や「アレクサンドロスの幸運」にも譬えられる。このFranｃois Ierへの頌詞はかつてCharles Quint (1500-1553) へのそれ (XV, 24sq.) とペアをなす[5)]。16世紀前半のヨーロッパ覇権の均衡を握るこの両雄に同じhommageの機会をもつことは、バランス感覚に優れた詩人の才であると同時に、昔からフランス贔屓のFerraraのEste家に仕える詩人の任であったのかも知れない。

４．Malagigiによる泉水彫刻の解説（その２）(XXVI, 48-51)

Malagigiの解説の前半は Franｃois Ierの頌詞で占められた感があるが、Malagigiがここまで語ると、Marfisa を始め聴衆はさらに図柄に現れる他の人物たちについても知りたいという気を起こす。そこで、先ず名指されるのがベルナルド、「メルランが特記して評価していた」(che Merlin molto nel suo scritto apprezza.) (XXVI, 48) と言うが評価していたのはMerlinよりも勿論Ariosto である。Malagigiは「彼のお陰で、ビビエナは、／隣のフィレンツェやシエナほどの名を上げる。」(Fia nota per costui — dicea — Bibiena, / quanto Fiorenza sua vicina e Siena.) (*ibid.*) と言うが、Bernardo Dovizi (Il Bibiena) (1470-1520) はMedici家の Leo Xの教皇着任(1513)と共に枢機卿となったAriostoの友人で詩人でもある。ここはプライベットな事情が絡む。

次に三人の枢機卿たちが来る。「ここでは誰もシジスモンドやジョヴァンニや／ルドヴィコ、ゴンザガ家、サルヴィアッティ家／アラゴン家の三人の前に出る者はない、／各々この乱暴な怪物の強敵である。」(Non mette piede inanzi ivi persona

---

４）『オルランド』初版 (1516) (40歌) 時にはFranｃois Ier頌詞はすでに含まれ、後年のフランス国王の不面目なPaviaでの虜囚(1525)でさえ同情的に語られる(XXXIII, 53)。

５）Charles-Quint頌詞は1526年版および決定版 (1532) (46歌) で追加される。なお、Franｃois IerとCharles-Quint両国王の頌詞の併置はScèveのDélie (1544) にも見られる(cf. diz.53, 54, 55)。

/ a Sigismondo, a Giovanni, a Ludovico : / un Gonzaga, un Salviati, un d'Aragona, / ciascuno al brutto mostro aspro nimico.) (XXVI, 49) これらの名は同時代人でないと判然とはしない。詩法上les vers rapportésで技巧的に並べられ、Malagigiに替わってさらに解説すれば、Sigismondo Gonzaga (?-1525) とは、MantovaのGonzaga家の当主Francescoの弟の枢機卿であり、Giovanni Salviati (1490-1553) とは、FirenzeのMedici家の当主Lorenzo il Magnificoの長女Lucreziaの娘婿で枢機卿、Giovanni delle bande nereであり、Ludovico (Luigi) d'Aragona (1474-1519)とは、Napoli王、Ferdinandoの息子の枢機卿である。いずれも当代イタリアの最強の家系の出である。

勿論Gonzaga家の当主、Ariostoのpatronne、Isabella d'Esteの夫、Francesco Gonzaga (1466-1519)もおり、その息Federico II (1466-1519)も父に従い、義弟(Isabellaの弟) Alfonso d'Este(1476-1534)と娘婿 (長女Leonoraの夫) Urbino公、Francesco Maria della Rovere (1490-1538) の二人も近くにいる。いずれもMantova、Ferrara、Urbinoの当主である。さらに、Francesco Maria della Roveresの息、Guidobaldo IIも父に負けをとらず、GenovaのFiesci家のOttobone、Sinibaldo二兄弟もおり、Francesco Gonzagaの叔父にあたるLuigi da Cazoloは允文允武の士である。

「エステ家の二人のエルコレ、二人のイポリット、／もう一人のエルコレ、もう一人のイポリット、／一人はゴンザガ家、他はメディチ家、も／怪物の痕跡を追い、これを困憊させる。ジュリアノは息子に、フェランテは兄に／遅れをとるとも思えず、...」(Duo Erculi, duo Ippoliti da Este, / un altro Ercule, un altro Ippolito anco, / da Gonzaga, de' Medici, le péste / seguon del mostro, e l'han cacciando stanco. / Né Giuliano al figliuol, né par che reste Ferrante al fratel dietro ;) (XXVI, 52) とこれも分かりにくい。しかし、いよいよAriostoのお膝下FerraraのEste家の登場である[6)]。二人のErcoleとは、当主Alfonso d'Esteの父Ercole I (1431-1505)と息Ercole II (1508-1559)で、後者はフランス王Louis XIIとAnne de Bretagneの娘Renéeを嫁としており、詩人Clément Marotも一時その宮廷に滴居を求める。二人のIppolitoとは、Alfonso d'Este の弟の枢機卿Ippolito d'Este (1479-1520) と次男で同じく枢機卿Ippolito II (1509-1572) であり、前者の兄弟は Ariosto の主君で『オルランド』の献呈主である。

もう一人のErcoleとは、Francesco Gonzagaの次男の枢機卿Ercole (1507-?)、もう一人のIppolitoとは、Lorenzo il Magnificoの孫(つまり三男のNemours公Giuliano息)の枢機卿Ippolito (1511-1535) である。「ジュリアノは息子に、」とは、Nemours公Giuliano (1478-1516) は息子の枢機卿Ippolitoに、「フェランテは兄に」とは、Francesco Gonzagaの三男Ferrante (1507-?) は兄の枢機卿Ercoleに遅れぬよう、との意味である。

この辺りはFerraraのEste家とは特に関係の深いMantovaのGonzaga家と

6）Este家自身に対する頌詞は勿論十分にスペースを費やし、BradamanteにMerlinの霊が現れ、妖術使Melissaの口から一大家系図が語られる(III, 15-62)。

FirenzeのMedici家、あるいはNapoliのAragon家出身の宮廷人や枢機卿たちで占められている。当時の『オルランド』の読者にはこのような解説抜きで詩句に散りばめられた固有名詞は、たとえ同名が多くとも、すべて身近なものであったであろう。

５．Malagigiによる泉水彫刻の解説（その３）(XXVI, 51-53)

後半部はその他の人物に当てられている。「...アンドレア・ドリアも／迅速さでは負けず、フランチェスコ・スフォルツァも／誰も自分を凌ぐことを許さない。」(...né che manco / Andrea Doria sia pronto ; né che lassi / Francesco Sforza ch'ivi uomo lo passi.) (XXVI , 51) Andrea DoriaはGenovaが生んだ、Charles-Quint麾下の偉大な提督である[7)]。Francesco Sforza (?-1535) はMilanoの当主Ludovico il MoroとIsabella d'Esteの妹Beatrice d'Esteの間の子で次男のFrancesco II (?-1535) である。

さらに「気高い、高名な、輝かしいアヴァロス家／の血筋からは二人おり、彼らの紋章には、／... ／一方はペスカラの不屈のフランチェスコ、／他はアルフォンソ・デル・ヴァストと読める。」(Del generoso, illustre e chiaro sangue / d'Avalo vi son dui c'han per insegna / ... / l'uno Francesco di Pescara invitto, / l'altro Alfonso del Vasto ai piedi ha scritto.) (XXVI, 52) に見られるのは、Pescara侯爵Francesco d'Avalos (1490-1524) とその従兄弟のVasto侯爵Alfonso d'Avalos (1502-1525) である[8)]。どちらもCharles-Quint麾下のスペインの提督で、前者は閨秀詩人Vittorio Colonnaの夫。他方、後者は、1531年10月Ariostoが、Alfonso d'Esteの使節として、教皇Clemens VIIのFerrara攻撃を阻止するため、援助を求めて会いに行くのがこの人物。この若者は『オルランド』の作者を使節としてより詩人として厚遇し、多分皇帝Charles-QuintにAriostoの才能を紹介したのもこの人物であろう。ちなみに、プラド美術館にはこのAlfonso d'Avalosを描いたTizianoの勇壮な肖像画が今でも見られる。

最後を飾るのは、「スペインの華」(l'ispano onor) (XXVI, 53) のConsalvo FerranteとMonterrato侯爵のGuglielmo IIIとである。あまりに大勢の英雄たちが画面に溢れるので、この二人を探すのも容易ではない。「あれほどMalagigiが賞賛するのに、私はどこへ見失ったのか？」とAriosto自身もまるで画面を目の当たりにするが如くに感慨を洩らす[9)]。かくて、次の場面では、Merlinの泉水彫刻の話は終わり、Malagigiの解説に満足した騎士たちやMarfisaは食事の後柔らかい緑の絨毯の上で休息をとる。するとそこへ新たな到来者が現れ新しい局面へと話を導くこととなる。

６．Digressio - Ekphrasis - Prophétie - Allégorie

したがって、上に見たMerlinの泉水彫刻の話は全体の物語の筋の流れを一時中

７）すでにこの人物の頌詞は以前見られた。Cf. XV, 30-34.
８）Cf. XV, 28-29.
９）これはよく見られるintrusion subjectiveのケースである。

断する形で挿入された「脱線話」(digressio) である。こういった風に物語の途中で話が急に正規の流れを脱して別の方向に逸れる、あるいは逸らす物語学上の技法である。例えば、『オルランド』では、XI, 22-28でAriostoが飛び道具の鉄砲や大砲がいかに邪悪な悪魔の発明物であるか、嘆く件がある。勿論、これはAriostoの時代の発明物であり、Charlemagneの時代の人物がこれを知っていたとは当然意図的なanachronismeではある。このような脱線は詩人Ariosto自身の直接読者に対する「呼びかけ・話しかけ」である場合が多い。登場人物の脱線は何か問われた事柄に対する説明であったり、その説明が一つの独立した話となれば、物語中の物語 (racconto nel racconto)、つまり、枠物語となって展開したりする。これは『オルランド』中には14個所も見られ、この作品全体に錯綜した多様性を与えている。

次に、脱線する動機が一つの建造物であったり、芸術品であったり、特異な地形や風俗であったりして話者や作者がこれを説明・解説・描写する場合もある。古代では、「見るにつけても驚くべき...」(thauma idesthai... ; mirabile visu...)といった常套句で始まる「描写法」(ekphrasis) である[10]。このMerlinの泉水彫刻もこれに相当するが、III, 15-62では、Bradamanteが悪人に突き落とされた洞穴において、妖術使のMelissaに出会い、MelissaにMerlinの霊廟に案内され、荘厳な場所の描写の後、Merlin 自身の歓迎の声に続きMelissaの口からBradamanteの腹から生まれるであろう後裔たちの霊が招致され、Este家の家系図が解説される。古代では、HomèreやVirgileが英雄AchilleやÉnéeの楯に描かれた未来図を叙述する場合もこの例である[11]。

『オルランド』では、未来の予言は常にEkphrasisを伴うかといえば、単に登場人物同士が旅の道中での対話の中で語られたり (XIII, 55-73 MelissaがBradamanteにEste家の女系系譜が語られる)、海上を航海中に予言されたり (XV, 19-36 AndronicaがAstolfoに未来のCharles-Quintの艦隊の航海を語る)することもある。しかし、予言は、Virgileの『エネイド』VIやDanteの『神曲』「地獄篇」の如く、冥界の霊が姿を現すとか、浮彫に刻まれた像が目前に浮かび上がるといったいわば「絵物語」の手法による場合の方が迫力があり、真に迫るものがある。「絵物語」といえば、15世紀半ばにPiero della FrancescaによるArezzoのサン・フランチェスコ聖堂の「聖十字架伝」に基づく壁画群を思い起こす。AriostoもRomaへの使者の任務の道すがらこのquattrocento最大の珠玉と云っていい芸術作品に触れたのではないだろうか？そこでも聖木を取り巻く予言のテーマが精緻な筆致で描き出されている。

最後に、この浮彫に登場する英雄たち、詩人と同時代を生きた歴史上の人物たちが、「貪欲」という怪獣を殺しに現れるであろうという予言を口実として、詩人と同時代の読者を喜ばせたというだけではなく、もう一度「貪欲」のアレゴリーを確認しておこう。時と共に次第に成長してゆく怪物のイメージはVirgile『エネ

10）拙稿L'ecphrasis d'œuvres d'art chez les poètes grecs anciens『言語文化研究』X, 1984参照。
11）『オルランド』にも楯や武器の描写は見られる。Cf. XX, 82; XXV, 15-16.

イド』IV の有名な「噂」のアレゴリーを思わせる。しかも「貪欲」が特に高位高官の者、聖職者たちに牙を向けるというあたりは、当時世俗的な権能に触手を延ばした教皇およびその側近たちの貪欲さを窺わせる。この点、「教皇とその孫たち」のテーマで肖像画を描いたMelozzo da Forli (Sisto IV) やRaffaello (Leo X) やTiziano (Paulo III) といった画家たちの直感したであろう「権力欲」に対する風刺と一脈通ずるものがある。

７．結び

Merlinの泉水彫刻の話は『オルランド』という巨大な建築物のほんの小部屋の壁面の一隅を飾る一飾りでしかない。しかしこういった細部に至るまで名人芸の筆致は行き届いており、伝統的な諸手法の結晶が窺われる。そしてなによりも1516-1532年当時にイタリア半島で活躍した人々を思い浮かべる時、この小さな装飾品はますますその輝きを増してくる。

（D. 1974、大阪大学教授）